

University Academic Repository

The Role of the Preference for Chinese Style in
Love Story: Focusing on Shodokikimimisekenzaru
Book IV Part III and Taketori Monogatari

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 欣 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/938

研究論文

恋愛譚における唐風好み考

～『諸道聴耳世間狙』四之巻三と『竹取物語』を中心に～

The Role of the Preference for Chinese Style in Love Story:
Focusing on Shodokikimimisekenzaru Book IV Part III
and Taketori Monogatari

王 欣*

Xin WANG

<要約>

従来、「不老不死の丹薬」、「八月十五日の家出」、「月宮殿へ行く」、挿絵という要素から上田秋成の作品『諸道聴耳世間狙』（以下、『世間狙』と略称する）四之巻三は、『竹取物語』、「嫦娥」の故事と関連付けられたが、詳細な分析が行われなかった。その他、唐土太夫の唐風好みの役割もまだ検討されていない。

本稿では、まず、『世間狙』四之巻三の住屋吉介と唐土太夫の恋愛譚を、『竹取物語』の帝の求婚譚と比較し、両作品の高い関連性を明らかにする。その次に、人物造型の変更、趣向の置換という視点から両作品の相違点を考察し、唐土太夫と住屋吉介の詩と和歌の贈答と、浄瑠璃『新うすゆき物語』の和歌、『江談抄』第四の都在中の詩と女房の和歌、謡曲『白楽天』の白楽天の詩と漁翁の和歌との関連性を明確にする。さらに、女性が詩を作り、男性が和歌を作るという設定から、人々の通念及び遊廓の規則に反しながらも、恋愛を展開していく唐土太夫と住屋吉介の滑稽さを読み解く。このことから、筋立てとして『竹取物語』の帝の求婚譚が受け継がれた『世間狙』四之巻三の恋愛譚が、遊廓の規定を無視する唐風好みの唐土太夫の滑稽譚として構想されていると結論付ける。

<キーワード>

上田秋成、浮世草子、諸道聴耳世間狙、竹取物語、唐風好み

* 武漢大学外国語文学学院 准教授・嘉悦大学経営経済学部 准教授

1 はじめに

明和元年（一七六四）十一月に、上田秋成（一七三四～一八〇九）の作品『諸道聴耳世間狙』¹⁾（以下、『世間狙』と略称する）の開板願書が出され、明和三年（一七六六）正月に、〈和訳太郎〉の署名のもと、『世間狙』²⁾が出版された。

『世間狙』四之巻三「公界はすでに三年の喪服」³⁾では、唐風好みの唐土太夫が描かれている。従来、唐風好みという視点から、『世間狙』四之巻三と先行浮世草子『鎌倉諸芸袖日記』一之巻第二「腐儒の智恵自慢校合の違ふた身代」、四之巻第一「浄瑠璃物真似も年功のいひ立」との関連性が指摘されている³⁾。また、中村幸彦は、「華美な衣服」、「書道に達していたが、後に男と走って、京都に住んだ」ことから、『世間狙』四之巻三の唐土太夫と、実在人物の茨木屋正太夫、春木屋梶との類似を考察した⁴⁾。そのほか、森山重雄の『上田秋成初期浮世草子評釈』では、『世間狙』四之巻三の題材として、『今古奇観』第七話「売油郎花魁を独占めにする事」、『世間母親容気』巻之一第一「高雄の紅葉より顔のてるお敦女郎」、巻之四第三「恋の手習とは白髪のお袋」が挙げられた⁵⁾。そして、拙論では『世間狙』四之巻三の前半部分の難題譚と『竹取物語』との関連性を詳細に検討した⁶⁾。

『世間狙』四之巻三の後半部分の恋愛譚に関して、堤邦彦、神楽岡幼子は、「不老不死の丹薬」、「八月十五日の家出」、「月宮殿へ行く」、挿絵という要素から、『世間狙』四之巻三を『竹取物語』、「嫦娥」の故事と関連付けたが、詳細な分析が行われなかった⁷⁾。確かに、『世間狙』四之巻三の最後に、唐土太夫にまつわる「不老不死の丹薬」、「八月十五日の家出」、「月宮殿へ行く」というような要素が取り入れられた。よって、物語の展開にしたがい、『世間狙』四之巻三の後半部分の恋愛譚と『竹取物語』との関連性について再検討する余地があると考えられる。さらに、『世間狙』四之巻三の恋愛譚における唐土太夫の唐風好みの役割を追究する論考は未だ行なわれていない。そこで、本稿では、人物造型、物語の展開、趣向の設定から、『世間狙』四之巻三の恋愛譚と『竹取物語』との異同を検討することを通じ、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の構成方法、唐風好みの役割を明らかにしようとする。

2 恋愛譚の異同

『世間狙』四之巻三の恋愛譚では、歌学者の一人息子である住屋吉介は、唐土太夫に対して恋心を抱いている。最初の頃、その恋心は唐土太夫に拒否されたが、住屋吉介が諦めずに唐土太夫に恋歌を贈ることによって、ついに二人は恋人になる。ところが、住屋吉介と恋人になった唐土太夫は、遊廓の遊女、引舟、遣り手に意見される。遊廓を抜けて、駆け落ちした二人はやっと黄檗山に着き、そこで唐饅頭の焼き売りをしていた。不老不死を追求するため、唐土太夫は丹薬を服した。その後、八月十五日の夜、病気になった住屋吉介を残し、唐土太夫は家出をして、行方不明になってしまう。

一方、従来『世間狙』四之巻三の結末部分との関連性が指摘された『竹取物語』は、『源氏物語』絵合の巻に「物語の祖なる竹取の翁」と記されている。『今昔物語集』巻第三十一の

第三十三「竹取の翁、女兒を見付けて養へる語」⁸⁾の帝に求婚され、喜んだかぐや姫と異なり、『竹取物語』⁹⁾では、かぐや姫は最初に帝の求婚を拒んだが、その後、二人は文のやりとりをし、心を慰め合う関係が続いていた。

『竹取物語』では、帝はかぐや姫に求婚した。最初の頃、帝の好意はかぐや姫に断られたが、諦めずにかぐや姫に和歌を贈ったため、二人は心を慰め合う関係になる。ところが、かぐや姫は月の都へ帰還する時期を知る。中秋の名月の美しい八月十五日の夜、帝の命令で都中の兵士たちに護衛されていたものの、なすすべなくかぐや姫は昇天していく。悲しむ帝と翁には形見に不死の薬と文が残されたが、帝は兵士たちを遣わして富士山ですべて焼かせてしまった。

さて、恋愛譚において、『世間狙』四之卷三は『竹取物語』とどのような関連性を持っているのだろうか。本文における両者の対応関係をまとめると、次のようになる。

場面一

出入の香具商人住屋吉介といふ男。もとは京の御所ちかき中川沖之進といふ哥学者の一人り息子。若気のならひとて色道より親の不興をうけて大坂へ立のき。紅粉おしろいの荷ひ売。好の道とて廓へはまりこみ。化粧部屋のしやらくら商ひに。ふと唐土が高情になづみ寝ても寤てもわすられず。折へはよそながら口説て見れど文盲がつてとりあへねば。

(『世間狙』四之卷三) (傍線引用者)

さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門聞こしめして(中略)御門、にはかに日を定めて、御狩に出給ふて、かぐや姫の家に入給ふて見給に、光みちて、きよらにてゐたる人あり。「これならん」とおぼして、近く寄らせ給に、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて候へど、初めよく御覧じつれば、類なくめでたくおぼえさせ給て、

「許さじとす」

とて、いておはしきさんとするに、かぐや姫、答へて奏す、

「をのが身は、此国に生れて侍らばこそつかひ給はめ、いといておはしきしがたくや侍らん」

と奏す。(中略)

「さらば、御ともにはいて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰なむ」

と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちに成ぬ。御門、なをめでたくおぼしめさるゝ事、せきとめがたし

(『竹取物語』) (傍線引用者)

場面一において、『世間狙』四之卷三の唐土太夫も『竹取物語』のかぐや姫も男性からの求愛を拒んだ。ただし、『世間狙』四之卷三の唐土太夫が遊女で、歌学者の一人息子の住屋

吉介が香具商人である。『竹取物語』の関連部分では、月の都の人であるかぐや姫と帝が主人公となっている。つまり、二つの作品における主人公の身分が違うのである。

場面二

此まゝ恋に朽なんもほいなしと。心のたけを薄雪ふうのちらし文に。はづかしい事はかない事筆の命毛ぐど〜としたゝめて。詠への詩囊ぶくろに入れてやりけるを。唐土ひらき見て口の文はよむに及はずと。恋哥の上ミに下の句を付てぞ戻しける

よし助か文に 枝たかきはなこすへの木末も折れば折る

もろこしか返事に きんくるべいこのきこらい〜

唐音にて其心はよめず。次に二句詩を賦したり

せいたいころもあらねはいわなをさむし 青苔匪衣岩猶寒 はくうんおひにてをまとはず 白雲似帯山不纏

叶ふやうにてかなはぬ返事。

(『世間狙』四之巻三) (傍線引用者)

御門、かぐや姫をとどめて帰り給はんことを、あかず口おしく覚しけれど、玉しみをとどめたる心地してなむ、帰らせ給ける。御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、

帰るさの行幸物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆへ

御返りごと、

葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の台をも見む

これを、御門御覧じて、いとど帰り給はん空もなくおぼさる。御心は、さらにたち帰るべくもおぼされざりけれど、さりとて、夜を明かし給べきにあらねば、帰らせ給ぬ。

(『竹取物語』) (傍線引用者)

場面二では、『世間狙』四之巻三の住屋吉介も『竹取物語』の帝も自分の恋心を抑えることができず、ヒロインに和歌を贈った。そして、ヒロインが返事をしたことにおいても、ヒロインへの愛情が一層高まったことにおいても両者が似通っている。ところが、『竹取物語』の和歌の贈答と違い、『世間狙』四之巻三では、住屋吉介が唐音が読めないため、唐土太夫は、唐音で付けた下の句とともに「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帯山不纏」という詩を住屋吉介に贈った。

場面三

よし助はおもひにしづみ其詩を和して又いひやりける

こげころも 苔衣きたるいはほはかたくともきぬ〜とけ山の帯は解なん

わりなくも恋侘て今は玉の緒もたゆるばかりと聞へしかば。夫程までわしをおもふてか

と心根がかあゆふなりてかへしは例のもろこし太夫

きみとあいむかふてうたゝあいたしきみ 与君相向転相親 きみとならびすみていつしんをとにせん 与君雙栖共一身

と唐詩の古語になつた口。夢現ともわきかねて。手の舞足のふみ所をわすれ。それからこゝの逢瀬かしこの首尾。しのびへに契りしが唐も倭もどこへやら。後は互の実と実としへの外は文花もなく。傍輩の目口かはきに見とがめられ。引舟遣り手が付廻してのこは異見。
(『世間狙』四之卷三) (傍線引用者)

かぐや姫のみ御心にかゝりて、たゞ独り住みし給。よしなく御方へにも渡り給はず、かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給。御返り、さすがに憎からず聞こえかはし給て、おもしろく、木草につけても御歌をよみて遣はず。
かやうに、御心をたがひに慰め給ほどに、三年ばかりありて
(『竹取物語』) (傍線引用者)

場面三のように、ヒロインへの愛情が高まってきた住屋吉介も帝も、引き続きヒロインに和歌を贈る。また、和歌の贈答によって、主人公の仲がますます良くなってきたことにおいても、両作品は類似している。しかし、『竹取物語』のかぐや姫の和歌の贈答と違い、『世間狙』四之卷三の唐土太夫は住屋吉介に詩を贈る。そのほか、『竹取物語』の文のやりとりによって、心を慰め合う関係を続けたかぐや姫と帝と異なり、『世間狙』四之卷三の唐土太夫は、遊廓の遊女、引舟、遣り手の意見を無視し、住屋吉介と深い仲となってしまう。

場面四

京の友達にたよりゆき。つまらぬ恋の欠落をかくまはれる気かくまふ気。(中略) 仙家の丹葉に不老不死の歡樂を究むべしと。妻がおぼへし葉ごしらへ。ちかき桃山の流れこそ武陵の人のまよひ道。桃源のしたどりぞと。丹竈をひらいて服するに豊ほどもきかばこそ。夫は風のこゝちとてぶらへとわづらひつけば。月宮殿へも入るところかさしつまりての月がこゑ。月に六日のつとめの中にかあゆい男が出来たのか。男の介病に倦たのか。但しは丹葉が利いて仙人になりもしたか。八月十五日の夜月のあきらかなるに家出してふたゞびかゑらず
(『世間狙』四之卷三) (傍線引用者)

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは、不死のくすり入れり。一人の天人言ふ、

「壺なる御くすりたてまつれ。きたなき所のもの、きこしめしたれば、御心地あしからむ物ぞ」

とて、持てよりたれば、わづか嘗め給て、すこし形見とて、ぬぎをく衣に包まんとすれば、ある天人、包ませず、御衣をとり出て、着せんとす。その時に、かぐや姫、

「しばし待て」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物ひと言、言ひをくべき事ありけり」

と言ひて、文書く。天人、

「遅し」

と、心もとながり給。かぐや姫、

「物しらぬことなの給そ」

とて、いみじくしづかに、朝廷に御文たてまつり給。あはてぬさま也。

(中略)

今はとて天の羽衣きるおりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬そへて、頭中将よびよせて奉らす。中将に、天人とりて伝ふ。中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せてまつりつれば、翁を、「いとおしく、かなし」とおぼしつる事も失せぬ。此衣着つる人は、物思ひなく成にければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。 (『竹取物語』) (傍線引用者)

場面四では、『世間狙』四之巻三の唐土太夫も、『竹取物語』のかぐや姫も八月十五日の夜家出をした。しかしながら、『世間狙』四之巻三の駆け落ちした唐土太夫は不老不死を追求するため、丹薬を服した。その後、自ら逃げる道を選んだ唐土太夫は八月十五日の夜、病気になった住屋吉介を残し、一言も言わずに家出をした。それに対して、『竹取物語』の月に帰らなければならないかぐや姫は天人からもらった不死の薬を「わづか嘗め」ただけで、後に不死の薬、帝への文を形見として頭中将に渡した。つまり、物語の最後に、厳しい現実の中で、家出をした二人のヒロインが選んだ恋の終わり方は異なっている。

このように、主人公の身分、ヒロインが男性に贈った文の内容、男女主人公の関係、ヒロインが丹薬を服した原因、ヒロインが選んだ恋の終わり方における相違を除けば、場面一、二、三、四では、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の人物造型、物語の展開は、最初に男性からの求愛を拒んだこと、文のやり取りによって男女主人公の仲が良くなってきたこと、厳しい現実に直面したこと、丹薬を服したこと、八月十五日の夜家出をしたことにおいて、『竹取物語』と高い類似性を示している。

3 恋愛譚における人物造型の変更と趣向の置換

前述したように、物語の展開において、類似性を示している『世間狙』四之巻三の恋愛譚と、『竹取物語』の間では、様々な相違が見られる。どうして両者の間に、そのような相違が生じたかを明らかにするため、まず、恋愛譚と関わる主要人物を比較し、表1にまとめる。

表1のように、『竹取物語』のかぐや姫、帝が、それぞれ『世間狙』四之巻三の恋愛譚の唐土太夫、住屋吉介と関連しているため、『世間狙』四之巻三の恋愛譚における人物造型の世俗化が見られる。また、人物造形の世俗化や人物関係の変化によって、『竹取物語』の帝との結婚を推し進めた竹取の翁と妻、月からの天人、かぐや姫を守る頭中将と対応する人物は『世間狙』四之巻三の恋愛譚に設定されていない。そして、『世間狙』四之巻三の恋愛譚では、住屋吉介との仲が深まった唐土太夫を諫める役として、揚屋の遊女、引舟、遣り手が

表1 恋愛譚と関わる主要人物

『世間狙』四之巻三 主要人物	『竹取物語』 主要人物
おらん・唐土(太夫)	かぐや姫(月の都の人・竹取の翁の養女)
住屋吉介(歌学者の一人息子・香具商人)	帝
揚屋の遊女、引舟、遣り手	無
無	竹取の翁と妻
無	天人
無	頭中将

新たに設定されたのである。

上述したように、主人公の身分、ヒロインが男性に贈った文の内容、男女主人公の関係、ヒロインが丹薬を服した原因、ヒロインが選んだ恋の終わり方において、『世間狙』四之巻三は『竹取物語』と異なる。こうしたヒロインの人物造形の変更と、先行浮世草子、及び実在人物の遊女茨木屋正太夫、春木屋梶との関連はすでに指摘されている¹⁰⁾。

さて、そのような人物造型の変更は、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の場面設定にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

場面二、三では、『世間狙』四之巻三の恋愛譚では、住屋吉介からの和歌に対して、唐風好みの唐土太夫は詩を贈ったが、『竹取物語』のかぐや姫と帝は和歌の贈答を行ったのである。つまり、『世間狙』四之巻三の恋愛譚では、男女の和歌の贈答という趣向が、和歌と詩の贈答に置き換えられた。

ところで、場面二、三では、なぜそのような趣向の置換が行われたのだろうか。

『世間狙』四之巻三の場面二では、唐土太夫を口説いて断られた住屋吉介は、諦めずに「心のたけを薄雪ふうのちらし文」にし、唐土太夫に恋歌の上の句「枝たかきはなの木末も折れば折る」を贈る。そして、住屋吉介のこの恋歌に対して、唐土太夫は、唐音で下の句「きんくるべいこのきこらいへ」を付ける。つまり、男女主人公二人で一つの歌を完成させる趣向が、『世間狙』四之巻三の恋愛譚に導入された。

『世間狙』四之巻三の「心のたけを薄雪ふうのちらし文」にした恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」と類似する内容は、仮名草子『うすゆき物語』¹¹⁾、書簡体小説『新うす雪物語』¹²⁾で見られる。ところが、この二つの作品の中の「ゑだゝかきはなのこずゑもおれはをるおよはぬこひもなるとこそきけ」という恋歌は、園部衛門が薄雪に贈った恋歌である。即ち、仮名草子『うすゆき物語』、書簡体小説『新うす雪物語』の恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」と関連する部分から、男女主人公二人で一つの歌を完成させる趣向は見出せない。

一方、恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」と関連する内容は、浄瑠璃『新うすゆき

物語』上巻¹³⁾にも設定されている。

口々小声に薄雪も、若此恋が叶はずば何とせうどふせうと。思ひいやます恋の歌人にし
らさじしる逆も。口なし色の短冊に。筆の立テどもわかちなく。

「枝高き。花の梢も折ればおる。及ばぬ恋」と書さして。打しほるれば「申何とぞ遊ば
したか。「いやコレ此歌はやうへに読かけし。が肝心の下の七文字。なるかならぬか
しれぬ故。苦になるはいの」と有ければ。「おつと夫レこそよい手がり。わたし次第
になされませ」と左衛門が傍に持て行。「只今の通りを姫君へ申たれば。中々どふもそ
んな事では堪忍が仕にくい。爰へくるがいやならば此歌の下の七文字。よかるう様にお
付なされて下されませ」。と指出せば手に取り上。「枝高き。花の梢も折ばおる。及ばぬ
恋と書れしは深き思ひの有やらん。お心休め」と筆取つて。「成とこそ聞ケ」と書付吟
じて見たれば。「枝高き。花の梢も折ばおる。及ばぬ恋もなるとこそ聞ケ」。

(傍線引用者)

浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻では、園辺左衛門は、薄雪が作った「枝高き。花の梢も折
ればおる。及ばぬ恋」に、「成とこそ聞ケ」を付加え、一つの歌を完成させる。つまり、『世
間狙』四之巻三の恋愛譚と同様に、浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻にも、男女主人公二人で
一つの歌を完成させる趣向が設定されている。しかし、浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻の薄
雪が上の句を作り出し、園辺左衛門が下の句を付ける設定と異なり、『世間狙』四之巻三の
住屋吉介が上の句を贈り、唐土太夫が下の句を付ける。即ち、恋歌の贈答において、二つの
作品の男女の立場が逆である。それに加えて、浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻の園辺左衛門は、
「成とこそ聞ケ」と書き、薄雪の恋心を受け入れる。だが、『世間狙』四之巻三の唐土太夫は、
唐音で「きんくるべいこのきこらいへ」と下の句を付ける。「きんくるべいこのきこらい
へ」¹⁴⁾の確かな意味が分からないが、唐土太夫が賦した詩「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帶山
不纏」の意味から見れば、「きんくるべいこのきこらいへ」は、住屋吉介の恋心を拒否す
る内容だと推定できる。よって、浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻の男性が女性の恋心を受け
入れるという設定と反対に、『世間狙』四之巻三の女性は男性の好意を拒否したのである。

このように、男女主人公二人で一つの歌を完成させる趣向が取り入れられたことにおいて、
『世間狙』四之巻三は、浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻と一致している。しかしながら、恋
問答する男女の立場、恋歌贈答の結果においては、両者は正反対である。しかも、唐風好み
の唐土太夫は、唐音で下の句を付け、住屋吉介の好意を拒否した。このような設定の変更に
よって、唐土太夫のことをいとしく思う住屋吉介の人物像と、傲慢な態度を取った唐土太夫
の人物像が、対照的に仕立てられたため、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の面白さが引き立
てられたと考える。

ところで、遊廓での男女の文の贈答に関して、『色道大鏡』巻第六¹⁵⁾では、次のような記

述が見られる。

男より好みてかゝする誓詞の前書と起請文に、真行草あり。其程一にしがひて案文を出す事、さだまれる法なり。傾城これを受る時の口決あり。

(傍線引用者)

そして、『色道大鏡』巻第二¹⁶⁾では、客が遊女に文を贈る時宜について、次のように述べている。

文のとりかはしは、女郎のかたより来らざる内、おとこよりはしめてやらぬものなり。おとこよりやりかくる事、初心者や田舎ものゝする事にて、道者の好む所にあらず。

(傍線引用者)

上記の内容から見れば、遊廓では、客が誠意を示す文は、真行草¹⁷⁾で書くべきである。そのほか、遊女からの文が届くまで、客から遊女には文を出さない。先に遊女に文を贈るのは、初心者や田舎者だけである。ところが、『世間狙』四之巻三では、「若気のならひとて色道より親の不興をうけ」た住屋吉介は、先に「薄雪ふうのちらし文」の恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」を唐土太夫に贈ってしまう。よって、『世間狙』四之巻三の住屋吉介が先に唐土太夫に恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」を贈ることは、文の書き方、文を出す時宜において、遊廓の定め事に反している。そのため、場面二では、遊廓に詳しい人物なのに、遊廓の定め事に従わずに、先に唐土太夫に恋歌「枝たかきはなの木末も折れば折る」を贈ってしまう住屋吉介のおかしみが描き出されたと考えられる。

また、『世間狙』四之巻三の場面二、三では、住屋吉介が唐音が読めないため、唐土太夫は、唐音で付けた下の句とともに「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帯山不纏」という詩を贈り出す。この詩によって、住屋吉介の恋心は、唐土太夫に拒否された。しかし、住屋吉介は諦めずに、唐土太夫の詩を和訳し、「苔衣きたるいはほはかたくともきぬ一山の帯は解なん」という恋歌を唐土太夫に贈る。

「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帯山不纏」という詩に関して、前掲の森山重雄の論説では、この詩と『江談抄』第四の都在中の詩、謡曲『白楽天』の白楽天の詩との関連性が指摘されたと同時に、この詩が『日本詩記』都在中の詩「白雲似レ帯圍二山腰一 青苔如レ衣負二巖背一」を逆にし、さらに否定形にしたものだと解釈が施された¹⁸⁾。

ここで注目したいのは、『江談抄』¹⁹⁾第四では、都在中の詩とともに、女房の和歌が並べられていることである。

はくうん おび に にくるめ せいたい ころも ごと いはほ せ お
 白雲は帯に似て山の腰を囲り 青苔は衣の如く巖の背に負はる

ありなか
 在中の詩

こけき いたる いはほ きぬき
 け衣着たる巖はまびろけて衣着ぬ山の帯するはなぞ 女房

『江談抄』第四の注釈によれば、ここの都在中の詩と女房の和歌の組み合わせは、漢詩と和歌との合唱である²⁰⁾。

その上、都在中の詩と女房の和歌を受容した謡曲『白楽天』²¹⁾では、白楽天と漁翁（住吉明神）が詩と和歌を作る場面が見られる。

ワキ「いや其義にてはなし、いでさらば目前の気色を詩に作つて聞せう、青苔衣を帯びて、巖の肩に懸かり、白雲帯に似て山の腰を囲る、心得たるか漁翁 シテ「青苔とは青き苔の、巖の肩に懸かれるが、衣に似たると候な、白雲帯に似て山の腰を囲る、面白し面白し、日本の歌もただ是候よ、苔衣着たる岩ほはさもなくて、衣着ぬ山の帯をするかな。」
 (傍線引用者)

『世間狙』四之巻三のこの部分の唐土太夫の詩、住屋吉介の和歌を、『江談抄』第四の都在中の詩、女房の和歌、及び謡曲『白楽天』の白楽天の詩、住吉明神の和歌と比べると、『世間狙』四之巻三の詩「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帶山不纏」は、『江談抄』第四の都在中の詩、謡曲『白楽天』の白楽天の詩を否定形にしたものである。また、『世間狙』四之巻三の和歌「苔衣きたるいはほはかたくともきぬ―山の帯は解なん」は、『江談抄』第四の女房の和歌、謡曲『白楽天』の住吉明神の和歌の上の句、下の句の最後の五文字を変えたものである。こうした各句の最後の部分を変更することによって、『江談抄』第四、謡曲『白楽天』の景色を描写する詩と和歌は、『世間狙』四之巻三では、巧妙に男女の恋心を描く詩と和歌に変容されたのである。

よって、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の詩と和歌の応酬は、『江談抄』第四の都在中の詩と女房の和歌、謡曲『白楽天』の白楽天の詩と漁翁（住吉明神）の和歌の唱酬と深く関連していることが分かる。さらに、そのような詩と和歌が恋愛譚に組み入れられたことによって、詩と和歌の合唱という趣向が、『世間狙』四之巻三に取り入れられたのである。

しかしながら、『世間狙』四之巻三では、唐土太夫（女性）が詩を作り、住屋吉介（男性）が和歌で返歌を作る。それに対して、『江談抄』第四の都在中（男性）が詩を作り、女房（女性）が和歌で返歌を作る。

平安時代、漢詩漢文は男性のものというジェンダー的観念ができあがった。以後は、一部の女官を除き、一般には女性は漢詩漢文に疎遠なものとの考え方が通念化したとされている²²⁾。よって、『世間狙』四之巻三の女性が詩を作り、その返歌として男性が和歌を作ると

いう設定は、人々の通常の認識を逆転したため、『世間狙』四之巻三の恋愛譚のおかしみが生じてくると思われる。

それに加えて、先述したように、『色道大鏡』巻第二によれば、遊廓の客への文の中で、古歌などを使うことは慎むべきことである²³⁾。

また、『色道大鏡』巻第九²⁴⁾では、遊女の文に関して、次のような記述が見られる。

なべての傾城仮名遣をしらずとも、哥などかくには、其哥の心をも聞覚えたるをこそ書べき事なれ。(中略) 女の文には、とかく音にてよむやうには、ずいぶんかゝぬがよし。 こんにち・みやうにち・せんどは・びんぎなどゝかくは、かたくてきゝにくし。 けふ・あす・いつぞやは・たよりなどゝは、やはらかにてきゝよし。(中略) すこしのかほりなれども、よろしく・なつかしくとかくよりは、よろしう・なつかしうとかくにてやさしくきこゆ。
(傍線引用者)

上記の内容によると、傾城仮名遣という特殊な仮名の遣い方が存在していた。また、遊女の文は、主に平仮名で書き綴った文章で、音色を重視し、柔軟さかつ優しさを追求していた。

ところが、『世間狙』四之巻三の唐土太夫が書いた文の中で、「青苔匪衣岩猶寒 白雲似帶山不纏」という詩が用いられている。古人が作った詩を否定形に変え、漢字だけで書き綴った唐土太夫の文は、内容、文字遣い、音色によって伝わってきた感触にわたり、遊女の文に求められていた基本から逸脱していると言えよう。

そのほか、上述したように、遊廓では、客が遊女に誠意を伝える文は、真行草で書くべきである。よって、『世間狙』四之巻三の住屋吉介が唐土太夫に、和歌「苔衣きたるいはほはかたくともきぬ―山の帯は解なん」を贈るというやり方は、遊廓の規則を破ったのである。そのため、この部分では、人々の通念に反する唐土太夫と住屋吉介の詩と和歌の贈答を通じ、遊廓の規則を守らず、恋愛を展開する唐土太夫と住屋吉介の滑稽さが描出されたと考える。

また、場面三では、住屋吉介から和歌をもらった唐土太夫は、住屋吉介の誠意に感動し、その恋心を受け入れ、唐詩「与君相向転相親 与君雙栖共一身」を住屋吉介に贈り、ついに住屋吉介と契りを結ぶことになる。唐土太夫が贈り出した「与君相向転相親 与君雙栖共一身」は、劉廷芝の『公子行』による詩句であり²⁵⁾、「何卒郎君と常に差し向つて親しく打ち解け、一つの家に雙び栖んで一體のやうにして、暫も離れずに暮したい」という遊女の答辞である²⁶⁾。

遊女が客への対応について、『色道大鏡』巻第四²⁷⁾には、次の内容が記されている。

我にふかくおもひ入たる客よとおもひつゝ、心たかぶりておほやうにあひしらふ事なかれ、是道理にしかず。此おとこ、初会にても再會にても、床へいるべきに、ふる事ゆめ―なかれ。二度めの約束あらば、はや文をやりてくるしからず、三四度あふよりして

は、知音の格にもてなして越度なし、女郎より物日をたのまぬ斗也。かくして以後、未とをらさるは女郎の失也、よく〜心得べし。(中略)たゞ一度などあひたる男へも、もらひ行ははやし、両度あひたる上にもらひ行も、男により品によるべし、これもいまだはやめ也。
(傍線引用者)

この記述から見ると、遊女は、馴染が浅いうちに、安易に客が自分に深く恋慕していると思込み、積極的に客と親しくなってはいけない。時間をかけて、客との馴染を深めていくべきである。だが、『世間狙』四之巻三では、住屋吉介から恋歌をもらった唐土太夫は、「夫程までわしをおもふてかと心根がかあゆふ」なって、忽ち住屋吉介に「与君相向転相親 与君雙栖共一身」という恋の誓文を贈り、住屋吉介と契りを結ぶ。よって、『世間狙』四之巻三の唐土太夫が、段取りを付けずに、客の住屋吉介と親しくなることは、遊廓の法則に背いている。そのため、『世間狙』四之巻三の場面三では、住屋吉介と恋人になった唐土太夫は、遊廓の遊女、引舟、遣り手に意見されたのである。

一方、場面一では、『竹取物語』の帝とかぐや姫は、『世間狙』四之巻三の恋愛譚では、唐風好みの唐土太夫と「京の御所ちかき中川沖之進といふ哥学者の一人り息子」である住屋吉介に変えられた。ヒロインの人物造形の変更は先行作品、実在人物との関連性はすでに指摘された。さらに、上述した詩と和歌の贈答部分と関連する謡曲『白楽天』の人物設定と対照してみると、『世間狙』四之巻三の唐風好みの唐土太夫と歌学者の一人息子の住屋吉介は、謡曲『白楽天』の詩が得意な白楽天と和歌の神住吉明神²⁸⁾に似通う。つまり、『世間狙』四之巻三の詩と和歌がそれぞれ得意な二人を、同じ場面に配置するという設定は、謡曲『白楽天』の人物造型と配置を参考にした可能性が考えられる。

そして、場面四において、『竹取物語』の八月十五日の夜、月に帰らなければならないかぐや姫は、天人からもらった不死の薬をわずか嘗めただけで、後に不死の丹薬と帝への文を形見として頭中将に渡し、昇天した。ところが、このような趣向が、『世間狙』四之巻三の恋愛譚の唐土太夫が自ら不老不死の丹薬を服し、八月十五日の夜、何も言わずに、病気になった住屋吉介を残し、一人で家出をしたという趣向に変えられた。そのような趣向の変更に関して、神楽岡幼子は、自ら不老不死の丹薬を服し、八月十五日の夜、何も言わずに、夫を残し、一人で家出をしたという唐土太夫の人物造形と、「嫦娥」の故事との関連性を指摘した²⁹⁾。

『世間狙』四之巻三の場面四では、「夫は風のこゝちとてぶら〜とわづらひつけば。月宮殿へも入るところかさしつまりての月がこゑ。月に六日のつとめの中にかあゆい男が出来たのか。男の介病に倦たのか」という記述が見られる。この内容から、住屋吉介が病気になった後、唐土太夫は「月がこゑ」に出て、「月に六日のつとめの中にかあゆい男が出来た」かもしれないということが分かる。

遊女が客への対応について、『色道大鏡』巻第四³⁰⁾には、次の内容が記されている。

たゞ一度などあひたる男へも、もらひ行ははやし、兩度あひたる上にもらひ行も、男により品によるべし、これもいまだはやめ也。さて何ほどなじみの、知音のおもきおとこもらひかくるとても、先のおとこくれぬ時はゆかれず、是むつかしき処にて、分別の入事也。 (傍線引用者)

この記述によれば、遊女には新たに「知音」ができて、「先のおとこ」のことを大事に扱わなければならない。そのことは難しいが、「分別の入事」だと定められている。しかし、それに反して、『世間狙』四之卷三の唐土太夫は、住屋吉介が病気になった後、「月がこゝろ」に出て、「月に六日のつとめの中にかあゆい男が出来た」かもしれないし、八月十五日の夜、何も言わずに、病気になった住屋吉介を残し、一人で家出をした。そのような唐土太夫の行動は、遊廓の作法と合致していないのである。

最後に、場面四では、『竹取物語』の月に帰らなければならないかぐや姫が、八月十五日の夜、皆との別れを悲しみながら、形見として竹取の翁に文を贈り、不死の丹薬と帝への文を頭中将に渡し、昇天した趣向が、『世間狙』四之卷三の唐土太夫が自ら不老不死の丹薬を服し、八月十五日の夜、何も言わずに、病気になった住屋吉介を残し、一人で家出をした趣向に置き換えられた。そのようなヒロインが選んだ恋の終わり方の相違によって、唐土太夫と住屋吉介との恋愛の失敗が一層鮮明に描き出されたと考えられる。

4 おわりに

『世間狙』四之卷三の恋愛譚では、人物造型の変更、趣向の置換、及び唐土太夫の唐風好みによって、浄瑠璃『新うすゆき物語』の男女主人公二人で一つの歌を完成させる趣向のみならず、『江談抄』第四の都在中の詩と女房の和歌、謡曲『白楽天』の白楽天の詩と漁翁（住吉明神）の和歌と関連する詩と和歌の合唱という趣向も、『竹取物語』の物語の展開と融合された。さらに、『世間狙』四之卷三の恋愛譚では、女性が詩を作り、男性が和歌を作るという設定が施されたため、人々の通念、及び遊廓の規則に反しながらも、恋愛を展開していく滑稽な唐土太夫と住屋吉介の人物像が浮き彫りになる。

その上、物語の最後では、『竹取物語』のかぐや姫と違い、唐土太夫が病気になった住屋吉介を残し、一人で家出をしたという恋の終わり方によって、遊廓の作法を無視した唐土太夫と住屋吉介との恋愛の失敗があらわになったのである。

このことから、『世間狙』四之卷三の恋愛譚は、筋立てとして『竹取物語』の帝の求婚譚、かぐや姫の昇天の展開をそのまま受け継がれただけでなく、唐風好みで、遊廓の規範に背く行動を取りながら、唐風を再現している唐土太夫の滑稽譚として構想されているとも言えよう。

注

- 1) 『享保以後大阪出版書籍目録』(大阪圖書出版業組合、1936年) 65頁。
- 2) 『上田秋成全集』第七巻(中央公論社、1990年)。底本(国立公文書館(内閣文庫)蔵、大坂心齋橋筋しほ町正本屋清兵衛板、明和三年正月吉日)。本文引用に際し、本文中のルビを適宜省略した。
- 3) 浅野三平「諸道聴耳世間猿論」女子大國文15号(1959年) 53頁。
森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1977年) 144-146頁。
- 4) 中村幸彦「秋成に描かれた人々(一)」國語國文32巻1号(1963年) 9-11頁。
- 5) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1977年) 144-146頁。
- 6) 王欣「難題譚の役割—『諸道聴耳世間狙』四之巻三と『竹取物語』を中心に—」日本文学社会研究1号(2018年)。
- 7) 堤邦彦「諸道聴耳世間猿の構造—世間と伝承—」國語と國文學57巻第3号(1980年) 65頁。
神楽岡幼子『『諸道聴耳世間狙』の挿絵』国文学70号(1993年) 34-35頁。
- 8) 日本古典文学大系26『今昔物語集』5(岩波書店、1972年)。底本(内閣文庫本A、林家旧蔵本)。
- 9) 新日本古典文学大系17『竹取物語 伊勢物語』(岩波書店、1997年)。底本(天理大学附属天理図書館蔵本)。
- 10) 浅野三平「諸道聴耳世間猿論」女子大國文15号(1959年) 53頁。
森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1977年) 144-146頁。
中村幸彦「秋成に描かれた人々(一)」國語國文32巻1号(1963年) 9-11頁。
- 11) 『假名草子集成』第6巻(東京堂、1985年) 229-265頁。底本(広島大学国語学国文学研究室・岩瀬文庫蔵、1632年)。
- 12) 『江戸時代女性文庫』47(大空社、1996年)。底本(成田山仏教図書館蔵、大阪向井八三郎板、1716年)。
- 13) 『上田秋成全集』第7巻(中央公論社、1990年)の「解題」によれば、1764年11月までに『諸道聴耳世間狙』が脱稿された。また、高田衛の『完本上田秋成年譜考説』(ペリかん社、2013年)によると、上田秋成は1734年に大坂で生まれ、1764年11月までに一度も江戸に下ったことがなく、主な生活拠点が上方に集中していた。
『義太夫年表』近世篇第1巻(延宝~天明)(八木書店、1979年) 129-130頁によれば、1741年5月16日に、大坂の竹本座で、『新うすゆき物語』が初演された。
新日本古典文学大系93『竹田出雲 浄瑠璃集』(岩波書店、1991年) 278-391頁。底本(早稲田大学図書館蔵、京二条通寺町西へ入丁正本屋山本九兵衛・大坂高麗橋二丁目出店山本九右衛門板、1741年)。
- 14) 『日本国語大辞典』第2版第4巻(小学館、2001年) 73頁によれば、「きこらい(帰去来)」は、「ききょらい(帰去来)」に同じである。
『日本国語大辞典』第2版第4巻(小学館、2001年) 33頁には、「ききょらい(帰去来)」が、「かえりなんいざ」と訓じ、「さあ帰ろう」と自らを促す意だと記している。
『国性爺合戦』第3(『近松全集』第9巻、岩波書店、1988年) 692頁では、「いや〜思ひもよらぬ事ならぬ〜。帰去来〜。びんくはんたさつ。ぶおん〜と又鉄炮をさしむかへば」、「いそいで繩をかゝれよそれがいやなら。帰去来〜びんくはんたさつ。ぶおん〜とねめつくる」という「帰去来」の二つの用例が見られる。
- 15) 藤本箕山原撰『完本色道大鏡』(友山文庫、1961年) 210頁。底本(京都大学文学部国語学国文学教室架蔵、1678年の序)。
- 16) 藤本箕山原撰『完本色道大鏡』(友山文庫、1961年) 65頁。底本(京都大学文学部国語学国文学教室架蔵、1678年の序)。
- 17) 『日本国語大辞典』第2版第7巻(小学館、2001年) 567頁によると、「真行草」は、漢字書体の楷書・行書・草書の総称である。
- 18) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1977年) 142-143頁。
- 19) 新日本古典文学大系32『江談抄 中外抄 富家語』(岩波書店、1997年) 108頁。底本(国文学研究資料館史料館蔵、三条西家旧蔵本、1735年)。
- 20) 注19)に同じ。
- 21) 新日本古典文学大系57『謡曲百番』(岩波書店、1998年) 543頁。
- 22) 『紫式部日記』の「補注」(角川学芸出版、2010年) 194頁。
- 23) 注16)に同じ。
- 24) 藤本箕山原撰『完本色道大鏡』(友山文庫、1961年) 243-244頁、248-249頁。底本(京都大学

- 文学部国語学国文学教室架蔵、1678年の序)。
- 25) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1977年) 143頁。
 - 26) 簡野道明『唐詩選詳説』(明治書院、1931年) 92頁。
 - 27) 藤本箕山原撰『完本色道大鏡』(友山文庫、1961年) 114頁、122頁。底本(京都大学文学部国語学国文学教室架蔵、1678年の序)。
 - 28) 新日本古典文学大系 57『謡曲百番』(岩波書店、1998年) 540頁。
 - 29) 注7) に同じ。
 - 30) 注27) に同じ。

(2019年9月27日受付、2019年11月26日再受付)